



ABILITY

ABILITY Pro徹底攻略！

その4 イメージを素早く形にできるフレーズを満載

ABILITYの注目すべき特徴の1つが、膨大な数が用意されたフレーズ素材でしょう。先代のSingerSongWriterからの伝統を受け継いだアレンジ機能もさることながら、即戦力となるAUDIOフレーズとMIDIフレーズ、さらにはコード進行やそのコードに対応したメロディなど実に多くのフレーズが用意されています。このフレーズを管理/活用するための便利な機能が「メディアブラウザ」なのです。(文：平沢栄司)

曲作りで使う素材を一元管理する メディアブラウザ

メディアブラウザは、ツールバーのボタンかウィンドウメニューから開きます。デフォルトではソングエディタなど、他のウィンドウの上にオーバーラップする形で表示されますが、必要に応じてメイン画面の上下左右いづれかにドッキングさせることもできます。ちなみに、SingerSongWriterからアップグレードしたユーザーなら、下にドッキングしておくことで従来の操作性に近くなりますね。

また、アレンジ、フレーズ、コード、プールの4つのパネルがあり、それぞれ曲作りで使うアレンジ・データ、MIDI/AUDIOフレーズ、コード進行、演奏を記録したフレーズを管理することができます。これらはタブをクリックすることで切り替わるため、必要なタイミングで必要な素材を選んで曲を構成していくことができます。

条件を設定して 候補が絞り込めるフレーズパネル

ABILITYに付属する約3,400種類のMIDIフレーズと約3,900種類のAUDIOフレーズを管理しているのが「フレーズパネル」です(画面1)。フレーズが収録されるフォルダの中身を単純に表示するだけで、その中から総当たりで探すのは大変な作業ですが、フレーズパネルには使い勝手の良い「検索機能」が用意されているのがポイントです。見つけたいフレーズの候補を素早く絞り

込んで試聴し、イメージに近いものを見つけてトラックに貼ることができるのです。

検索の条件は、フレーズパネル上段のメニューから行います。ここでは、ジャンル、楽器、拍子、タイプ、構成の4つの項目が用意されています。通常は、ジャンルと楽器で絞り込むだけで十分でしょう。ちなみに、タイプではLoopとOneShot、構成ではイントロ、フィルイン、エンディングの条件を設定して絞り込みます。さらに絞り込みの範囲を限定したい時は、詳細検索の出番です。テンポ、キー、ファイルの種類、キーワードの条件を設定して絞り込むことができます。これらを組み合わせることで「ロック」の「ドラム」で「テンポ130±10」の「WAVEファイル」のような条件の設定も可能です。

また、フレーズのリストには、より詳細なジャンル表示や具体的なテンポの値とフレーズの小節数、そして、フレーズのポイントを要約したキーワードの表示があるので、これらもフレーズ選びの参考になるでしょう。この項目部分をクリックすれば、その項目の内容に応じて昇順、降順でフレーズをソートすることもできます。

アレンジパネルで様々なジャンルの アレンジを試聴してみよう

SingerSongWriterから受け継ぐアレンジ機能は、ドラム、ベース、コード×2、オプリの5パートのアレンジ・データを基に、指定したコード進行に応じてイントロ、A/Bメロ、サビ、エンディングなどの伴奏トラックをアレンジパネルからのドラッグ&ドロップで作成できるものです(画面2)。

もちろん、そういった用途で使っても良いのですが、様々なジャンルの音楽図鑑、あるいはもっと単純に曲作りのアイデアを得るためのネタ帳みたいな使い方もオススメです。

例えば、自分の知らないジャンルの曲を作る場合に、アレンジデータを試聴すればリズムやコード進行、アレンジの特徴や定番楽器などをパッと知ることができます。また、曲作りに煮詰まった時など、任意のアレンジ・データやその中のパートを聴いてみると、それが刺

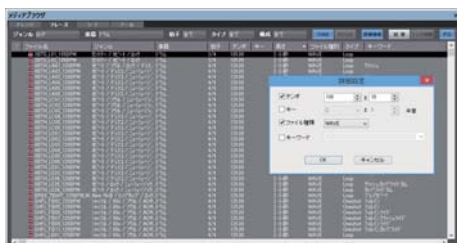
激になって何か新しいアイデアが生まれるかもしれませんね。

このアレンジデータを試聴するには、MIDIトラックと演奏用の音源のセットアップが欠かせません。ソングを新規作成する場合は、テンプレートから「MIDI (HyperCanvas) 16トラック AUDIO 8トラック 1ミキサー」が「MIDI (INVSC) 16トラック AUDIO 8トラック 1ミキサー」を選択しておくのが早道でしょう。既にAUDIOトラック中心で作業を始めているなら、VSTインストゥルメントウィンドウから音源としてHyperCanvasがINVSCを呼び出し、ソングエディタでMIDIトラックを追加して、出力デバイスと呼び出した音源に設定。さらに、各トラックのMIDIチャンネルとアレンジパート名の設定の確認と調整...と少々手間がかかりますが、自力でセッティングしていくことも可能です。

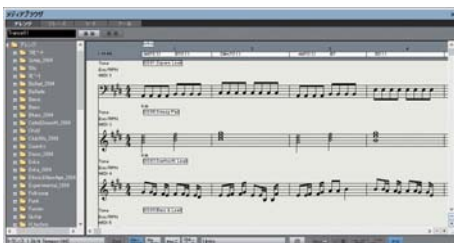
コードパネルでコード進行のパーツ をつないで1曲分のコードを作成

コードパネルには430種類のコード進行、300種類のメロディ付きコード進行が用意されています。このコードのみのデータ(ファイル名の頭文字が「C」)とメロディ付きのデータ(頭文字が「M」)は、ファイル名とリストのメロディの項目でチェックできますが、「メロディ」の項目で昇順/降順を切り替える方法が簡単です。クリックごとにメロあり/メロなしが入れ替わります。各コード進行は2~4小節となっていますが、コードパネルには手前のコードに続くコード進行を絞り込む機能が用意されているので、知識がなくても次々とコードをつないで1曲分の進行を組み立てることも不可能ではありません(画面3)。

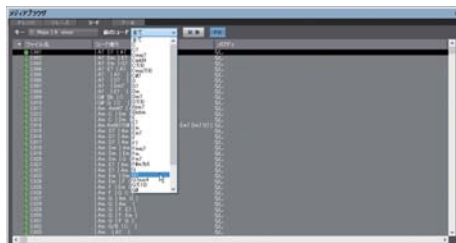
今回は、コード進行と合わせてMIDIフレーズやAUDIOフレーズを活用する方法と、MIDIの打ち込み機能、そして、プールパネルについて紹介する予定です。



画面1 フレーズパネルは、膨大なMIDI/AUDIOフレーズから希望のフレーズを素早く見つけ出せる絞り込みや検索の機能を備えているのがポイントだ



画面2 伝統のアレンジデータは、伴奏パートの作成以外でも試聴してコード進行やアレンジなどの図鑑のような使い方をしてみるのも良いだろう



画面3 コードパネルには、試聴して気に入ったものを自分で選ぶ以外にもコード進行のデータをつなぐための機能が用意されている